

〈心〉をたどる源氏物語の授業（1）

——夕顔巻の場合——

小川 満江

◇ はじめに

「源氏物語」を教材として扱う時、読み直しをするたびに、細やかな描写から新たなことに気づかされ、源氏物語の世界に心が引きつけられる。登場人物それぞれの魅力、作品にちりばめられる色彩感覚の豊かさ、綿々とした心理描写、場面の的確な描写、はつとするほどの味わい深い表現、など、『源氏物語』の魅力は一言では言い表せない。さまざまな魅力を持つ作品であるが、その根底に流れているのは人間の心への関心である。作品に描き出される心は長い年月を経ても、国が違っても、読む者を、心をめぐる思索へと誘う。

「源氏物語」学習の前後に〈物語論〉〈もののはれ〉論として単元を組んだことがある。本居宣長の「源氏物語玉の小櫛」や「源氏物語」〈蜜〉の巻を教材とした。

「源氏物語玉の小櫛」で、宣長は物語の効果を述べつつ、「もののはれをもしるものなり。」と結び、物語は「人の情の感すべき事」（「石上私淑言」）を知るために読むのだと述べている。宣長の物語論

の核になっていることは人の心の動きだと考えられる。

さてそれはいかなる趣なる物にて、何のためによむものぞといふに、大かた物がたりは、世の中に有りとある、よき事あしき事、めづらしきことをかききこと、おもしろき事あはれなる事、などのさまざまを、書あらはして、そのさまを、繪にもかきまじへなどして、つれづれなるほどの、もてあそびにし、又は心のむすは、れて、物おもはしきをりなどの、なくさめにもし、世の中のあるやうをも心得て、もののはれをもしるものなり。

〔源氏物語玉の小櫛〕〈すべての物語書のこと〉

また宣長は「あはれ」について次のように論じている。

物のはれをしるといふ事、まづすべてあはれといふはもと、見るものきく物ふるゝ事に、心の感じて出る、嘆息の聲にて、今の俗言にも、「あ、」といひ、「はれ」といふ是也。

又後の世には、あはれといふに、哀の字を書て、たゞ悲哀の意とのみ

思ふれど、あはれは悲哀には限らず、うれしきにも、おもしろきにも、たのしきにも、をかしきにも、すべて「あ、はれ」と思はる、は、みなあはれ也。さればあはれにおかしくとも、あはれにうれしくとも、つらねていへり。そはおかしきにもうれしきにも、「あ、はれ」と感じたるを、あはれにとはいへる也。

〔源氏物語玉の小櫛〕《なほおむね》

「物のあはれ」は生活のさまざまな場面で心に感じて出る「ああ」「はれ」だと言う。「源氏物語」にはこの「あはれ」が多くの登場人物を通して描かれている。人間の心について深く思索する紫式部は、長い年月を経ても変わることのない人間の複雑に揺れ動く心を語っているのである。

紫式部の思索を導きの糸として、生徒たちに心について考える場を用意し、生徒たちの心を耕し、人間観を深めさせる試みは、現代の教育現場において大切なことだと考へる。

「源氏物語」において「心」は、場、事件、人との関係の中で描き出されている。「源氏物語」が描き出す心をたどる授業をどのように構築したらよいか、これまでに扱った教材を分析し、実施した授業を振り返りつつ、考へていきたい。

本稿は「夕顔巻（恋のはじまりと別れ）」の学習についてまとめたものである。夕顔巻を教材とする授業は高校二年次の生徒に対して実施してきた。これまでに扱った教材をもとに、〈心〉をたどる授業をどのように構築するか、改めて考へてみたい。

教材として夕顔巻の二場面を扱うこととする。一つは、冒頭の垣

間見の場面、夕顔との恋のはじまりを語る場面である。もう一つは突然、怪異的な出来事が起こって夕顔を死なせてしまう場面である。夕顔物語は「雨夜の品定め」（帚木）で頭中将が語った体験談に登場する「常夏の女」とつながっている。源氏は頭中将、左馬頭、藤式部丞の恋愛談義を聞く中で、「中の品」の女性に興味をそそられ、中でも関心を抱いたのが頭中将の恋人「常夏の女」のことであった。頭中将の語りの一部を紹介し「常夏の女」の人物像を捉えさせておきたい。

本研究では、「若紫巻（恋の始まり）」「葵巻（別れ）」「賢木巻（別れ）」「須磨巻（別れ）」「落標巻（出会い）」「御法巻（別れ）」「玉鬘巻・竹河巻・浮舟巻（脇役の心の描き方）」についても取りあげていこうと考へている。

1 夕顔物語の序として

帚木巻の次の箇所を単元の導入として扱いたい。中将が語っている箇所である。

①親もなく、いと心細げにて、さらばこの人こそはと事につれて思へるさまざまちうたげなき。かうのどけきにおだしくて、久しくまからざりしころ、この見たまふるわたりより、情なくうたてあることをなむさるたよりありてかすめ言はせたりける、後にこそ聞きはべりしか。

さるうきことやあらむとも知らず、心には忘れずながら、消息などもせで久しくはべりに、むげに思ひしをれて、心細かりければ、幼き者などもありしに思ひわづらひて、撫子の花を折りておこせたりし」とて

涙ぐみたり。「さて、その文の言葉は」と問ひたまへば、「いさや、ことなることもなかりきや。」

A 山がつの垣ほ荒るともをりをりにはあはれはかけよ撫子の露

思ひ出でしままにまかりたりしかば、②例の、うらもなきもののから、いとも思ひ顔にて、荒れたる家の露しげきをながめて虫の音に競へる気色、昔物語めきておほえはべりし。

咲きまじる色はいづれと分かねどもなほとこなつにしくものぞなき

大和撫子をばさしおきて、まづ塵をだになど親の心をとる。

B うち払ふ袖も露けきとこなつに風吹きそふ秋も来にけり

とはかなげに言いなして、③まめまめしく恨みたるさまも見えず、涙を漏らし落としても、いと恥づかしくつつましげに紛らはし隠して、つらきをも思ひ知りけりと見えむはわりなく苦しきものと思ひたりしかば、心やすくて、またとだえおさはべりしほどに、跡もなくこそかき消ちて失せにしか。

(帯木卷八一〜八三頁)

夕顔の思ひはA、B二首の歌に示されている。Aでは自分たちの子どもに対して情けをかけてくださいと率直に伝え、Bでは訪れないことを嘆いている上に、「嵐吹きそふ」とあるように頭中将の妻側からの脅迫が加わっている状況をさりげなく伝えている。

①、②、③は頭中将から見た夕顔像である。

① 身寄りもなく心細そうでおとなしく、頭中将だけを頼りに思っている様子が可憐である。

② 頭中将が訪ねてみるといつものようにわだかまりはない様子であるが、物思いに沈んで庭を眺めながら虫の音と競うように泣く様子を昔物語にありそうに感じている。

③ 恨めしく思っている様子も見せず、涙をこぼしても遠慮深そうに隠し、自分の本当の思いを中将に悟られることをつらく思っていると捉えている。

「昔物語めきて」とあるが、頭中将にとつて夕顔とのひとときは、現実離れた夢の中の出来事のようにも感じられたのだろうか。

注目させたいのは源氏の「さて、その文の言葉は」という問いかけである。源氏は頭中将の体験談に聞き入り、女に心惹かれているようである。源氏は女のどんなところに惹かれたのかを考えさせた。おとなしくて、つらいことがあっても男を責めることもなく、遠慮深くて本当の思いを悟られないようにする女は、これまで関わったことのないような女性だったのだろう。そんな女がどんな言葉を頭中将によこしたのか、どんな思いを歌に込めていたのかと強い関心を持ったのだと考えられる。ここでの源氏の関心が夕顔物語へとつながっていく。

2 恋のはじまり

夕顔巻冒頭「六条わたりの御忍び歩きのところ」から「隙々より見ゆる灯の光、螢よりけにはのかにあはれなり」までを教材としたい。乳母の家の隣家を垣間見る場面である。垣間見を中断し、乳母の家に入り、見舞っている場面は省略する。この場面については、一つ一つ丁寧に解釈するのではなく、はじめりとしての舞台設定やイメージ、源氏の思いを中心にして焦点化した授業内容を考えたい。本文を引用しながら、授業で押さえたい内容を整理する。

次は垣間見がはじまる場面である。

御車入るべき門は鎖したりければ、人して惟光召させて、待たせたまひけるほど、むつかしげなる大路のさまを見わたしたまへるに、①この家のかたはらに、檜垣といふもの新しうして、上は半部四五間ばかり上げわたして、簾などもいと白う涼しげなるに、をかしき額つきの透影あまた見えてのぞく。立ちさまよふらむつ方思ひやるに、あながちに丈高き心地ぞする。いかなる者の集へるならむと様変りて思さる。

御車もいたくやつしたまへり、前駆も追はせたまはず、誰とか知らむとうちとけたまひて、すこしさしのぞきたまへれば、門は部のやうなる押し上げたる、見入れのほどなくものはかなき住まひを、あはれに、いづこかさしてと思ほしなせば、玉の台も同じことなり。

②切懸だつ物に、いと青やかなる葛の心地よげに這ひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉ひらけたる。「をちかた人にも申す」と独りごちたまふを、御隨身ついゐて、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲きはべりける」と申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、この面かの面あやしうちよるほひて、むねむねしからぬ軒のつまなどに這ひまつはれたるを、「口惜しの花の契りや、一房折りてまわれ」とのたまへば、この押し上げたる門に入りて折る。

③さすがにされたる遣戸口に、黄なる生絹の単袴長く着なしたる重のをかしげなる出で来てうち招く。白き扇のいたうこがしたるを、「これに置きてまゐらせよ、枝も情なげなめる花を」とて取らせたれば、門あけて惟光朝臣出で来たるとして奉らす。

源氏は乳母の家の門が開くのを待つ間、なんとなく隣家を垣間見

ている。はじめから強い関心を持つて見ているのではない。源氏が垣間見たのは女房たちであつて、その家の女主人はまだ姿を現していない。しかし源氏は女たちのたたずまいに関心を持ちはじめている。作者は巧みにこの場面を展開しており、「花の名は人めきて」や「口惜しの花の契りや」は花の夕顔から夕顔という女性を暗示していると考えられる。

① 白い簾を通して見える女たちの美しい額や、こちらをのぞいている様子を、源氏は珍しく感じている。この場面は、頼りなく粗末な家に住んでいる女たちへの源氏の関心から始まっている。

② 次に源氏は、塀にかかる蔓草に咲いている白い花に興味を持つ。その花は、自分だけは楽しそうに笑顔を見せていると擬人的に表現される。隨身が、白い花は夕顔で、人間らしい名前がついていると申しあげると、源氏は残念な花の運命だと述べ、ここでも擬人的な表現が使われている。

③ 隨身が花を折ったのを見て、童が、花を載せるための香をたきしめた白い扇を渡してくれる。源氏はここでただならぬ女性への関心を持ちはじめたと考えられる。

この流れが夕顔物語のはじまりである。①から③の流れを生徒に押さえさせたい。また擬人的な表現や「白」という色が多用されていることの意味についても考えさせたい。

この後源氏は扇に書かれていた歌「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」を興深く思い、歌の作者の素性を知りたがる。そして歌をもらったことに対して見過ごしてしまえず、「よりにて

こそそれかとも見めたそかれにほのぼの見つる花の夕顔」を返す。

この二首の歌についてはさまざまな解釈があるが、それらを紹介しつつ内容を把握させたい。いずれにしても、まだ見ぬ女性とのこの二首の歌のやりとりで、源氏の心は高まり、次第にその女性に心惹かれていく。源氏の返歌に対してどう返したらいいか話し合っている女たちの様子が述べられたあと、次のように続く。

御前駆の松明ほのかにて、いと忍びて出でたまふ。半部は下ろしてけり。隙々より見ゆる灯の光、螢よりけにほのかにあはれなり。

(夕顔卷一四一―一四二頁)

作者は短文を交えこの場面をしつとりと終わらせている。源氏の心情を直接示す表現はないが、それとなく源氏の心の動きが感じ取れる箇所だと思う。「半部は下ろしてけり」の後には、この場を去ることを心残りに思っている源氏の気持ちがかがえる。次の描写は、隙間から漏れる燈火の光を、螢の淡い光と重ね、それよりももっとかすかだとするので幻想的な雰囲気を出すとともに、はかなさや寂しさを感じさせるものとなっている。この表現からは源氏的心残りや出会っていない女性のイメージ、頭中将の話に出た「常夏の女」のイメージとの連関、はかない恋の展開の暗示なども感じられる。

このように一つの場面を閉じた作者の意図やこの描写から感じ取ったことなどを生徒にまとめさせたい。

3 廃院での夕顔と源氏

廃院で過ごすうちに夕顔は少し源氏に打ち解けていく。しかし、夕顔は気味悪さを感じる院にいて、しだいに恐怖感を強めている。

一方源氏は夕顔をいとしく思いつつも、帝や六条御息所にも思いを馳せ、源氏の心には様々な思いが行き交っている。怪異な事件が起こる直前の場面である。

たとしへなく静かなる夕の空をながめたまひて、奥の方は暗うものむつかしと、女は思ひたれば、端の簾を上げて添ひ臥したまへり。夕映えを見かはして、女もかかるありさまを思ひの外にあやしき心地はしながら、よろづの嘆き忘れてすこしうちとけゆく気色いとらうたし。つと御かたはらに添ひ暮らして、物をいと恐ろしと思ひたるさま若う心苦し。

格子とく下ろしたまひて、大殿油まゐらせて、「なごりなくなりにたる御ありさまにて、なほ心の中の隔て残したまへるなむつらき」と恨みたまふ。

内裏にいかにも求めさせたまふらんを、いづこに尋ぬらんと思しやりて、かつはあやし心のや、六条わたりにもいかに思ひ乱れたまふらん、恨みられんに苦しいことわりなりと、いとほしき筋はまづ思ひきこえたまふ。何心もなきさし向かひをあはれと思すまに、あまり心深く、見る人も苦しき御ありさまをすこし取り捨てばやと、思ひくらべられたまひける。

(夕顔卷一六三頁)

この範囲については、源氏の夕顔への思いを示す語句「らうたし」「若う心苦し」「恨みたまふ」「あはれと思す」を主に取り上げて、廃

院で夕顔と逢瀬を共にしている源氏の心をたどらせたい。

4 物の怪の出現と夕顔の死

教材として扱うのは「宵過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに、御枕上にいとをかしげなる女あて、『おのがいとめでたしと見たてまつるをば尋ね思はさで、かくことなることなき人を率ておはして時めかしたまふこそ、いとめざましくつらけれ』とて、この御かたはらの人をかき起こさむとすと見たまふ。」(夕顔巻一六四頁)から、「右近、大夫のけはひ聞くに、はじめよりのことうち思ひ出でられて泣くを、君もえたへたまはで、我ひとりさかしがり抱き持ちたまへりけるに、この人に息をのべたまひてぞ、悲しきことも思されける」とばかり、いとたくえもとどめず泣きたまふ。」(夕顔巻一七〇頁)である。教材としては長めになるが、この範囲で主に源氏の心をたどる授業展開を考えたい。夜になって怪異な出来事が起こり、夕顔は物の怪によって命を奪われる。若い源氏にとっては衝撃的な出来事であった。この場が作者によってどのように設定されているか、目の前で恋人を亡くしてしまった時の源氏の行動や心がどのように描かれているのかをまず読み取らせたい。周囲の状況、夕顔の様子、右近の様子、源氏の言動と心情を次のような表に整理した。A～Eの場面に分けている。各場面では、周囲の状況に応じた源氏の言動と心情が細やかにリアルに描かれている。ここでの授業展開は、周囲の状況に応じて変化する「源氏の言動と心情」をまず丁寧に読解させたい。

A

周囲の状況	夕顔の様子	右近の様子	源氏の言動と心情
<ul style="list-style-type: none"> ・御枕上にいとをかしげなる女あて ・灯も消えにけり 	<ul style="list-style-type: none"> ・山彦の答ふる声いと疎まし ・人え聞きついで参らぬ 	<ul style="list-style-type: none"> ・いみじくわななきまどひ ・汗もしとど ・我がの気色 	<ul style="list-style-type: none"> ・「物怖ぢをなんわりなくせさせたまふ本性にて、いかに思さるるにか」 ・「いかでかまからん、暗うて」 ・「渡敷なる宿直人起こして、紙燭さして参れと言へ」 ・「あな若々し」と、うち笑ひ ・手を叩き

宵を過ぎて源氏が眠りかけたころ、枕元に座って源氏が夕顔をか
わいがることへの恨みを述べ、夕顔を起こそうとしている女の姿を
見た。物に襲われるような気がしてはっと目覚めると、灯も消えた。
源氏は気味悪く思い、太刀を引き抜いて魔除けをし、夕顔の侍女
である右近を起こすが、右近も同様の夢を見たのか恐がっている様

子である。渡り廊下にいる宿直人を起こし紙燭をつけて持つてくるよう伝えよと言いつけても、暗くて行けないと答える。右近に対して、子供じみてると笑い、手を叩いて呼ぶが、戻ってくるのはこたまだけである。誰もやって来ない中、夕顔はひどく震えておびえ、どうしてよいかわからないような面持ちで、汗ぐっしよりになり正気を失っている様子である。右近は臆病な性格である夕顔がどんなに恐がっているかと心配する。

物の怪があらわれ、暗くて静かな邸内の無気味さが描かれる。怪異な出来事が起こり、恐がる右近と正気を失っている夕顔を前にして、源氏は冷静さを保ち、事態に対処しようとしている。

B

<ul style="list-style-type: none"> ・ 渡殿の灯も消えにけり ・ 風すこしうち吹きたる ・ 人は少なくみな寝たり ・ 預かりの子 ・ 若き男 ・ 上童・隨身 ・ 預かりの子 ・ 起きたれ ・ 弓弦うち鳴らして、「火危し」 			<ul style="list-style-type: none"> ・ いか弱くて昼も空をのみ見つるものをいとほしと思して ・ 「我人を起こさむ、」右近を引寄せ、西の妻戸に出で、戸を押し開け
--	--	--	--

源氏は、か弱くて昼も物思いにふけり空ばかり見つめていた夕顔の様子を思い、今の状態を気にかけている。源氏は右近を近くにさせた。預かりの子、上童、隨身は皆寝ていたが、誰かを起こすために西の妻戸に出て戸を開けると、渡り廊下の灯も消え、風も少し吹いていた。呼ぶと預かりの子が起きてきた。源氏は紙燭をつけて持つてくることを言いつけ、その子を通して隨身にも弦打ちをして魔除けをし、声を絶やさぬようにと命じた。また惟光の動向を尋ねる。預かりの子が弓弦を鳴らしながら部屋に帰って行くなかで、源氏は宮中での夜の慣習を思う。

ここでも源氏はまだ冷静に、事態に対処しようとしている。気弱な夕顔に対する配慮が足りなかったことを後悔する源氏の思いも感じられた。部屋の中だけでなく邸内全体が暗くなっていること、風も吹き始めたことが描写され、無気味さが強調されている。無気味な状況で、夕顔のことを気がかりに思いつつも、預かりの子に対してきばきと落ち着いて指示をしている源氏の姿が浮かび上がってくる場面である。

C

	<ul style="list-style-type: none"> ・ さながら臥し 		
	<ul style="list-style-type: none"> ・ かのうた ・ 「いととうたて、乱り心地のあしうはれば、 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 帰り入りて探り ・ 「荒れたる所は、狐などやうのもの、人をおびやかさんとて、け恐るしう思はずならん。まるあれば、さやうのものにはおどされじ。」引き起こし 	

<ul style="list-style-type: none"> ・紙燭持て参れり ・長押にもえ ・夢に見えつるゝ女面影に見えて消え失せぬ 	<ul style="list-style-type: none"> ・息もせず ・なまなよと ・して、我にもあらぬさ ま 	<ul style="list-style-type: none"> うつ伏し臥してはべるや。御前にこそわりなく思さるらめ
	<ul style="list-style-type: none"> ・ただ冷えに冷え入りて息はとく絶えはてにけり 	<ul style="list-style-type: none"> ・動くべきさ まにもあらぬ
		<ul style="list-style-type: none"> (夕顔を) かい探り ・引き動かし ・物にけどられぬるなめりとせむかたなき心地し ・御几帳を引き寄せて、「なほ持て参れ」 ・召し寄せて、見たまへ ・めづらかにむくつけけれど、まづこの人いかになりぬるぞと思ほす心騒ぎに、身の上も知られたまはず添ひ臥して「やや」とおどろかし ・言はむ方なし

部屋に戻って探ってみると、夕顔はそのまま臥して、右近はうつ伏せになっている。狐などが人を脅かそうとしているのだろうか、わたしがいるならばそんなものには脅かされないと強がり、右近を引き起こす。右近が、夕顔がどんなに恐がっているかと心配するので、源氏が夕顔を探ると息もしない。ゆすつても正気を失っている様子なので、物の怪に気を奪われたのだろうかどうしようもない気

持ちになる。そこに預かりの子が紙燭を持ってきた。右近も動く様子が無いので、夕顔の姿を隠すために几帳を引き寄せる。遠慮している預かりの子に紙燭を近くに持って来させ、灯りを自身で取り寄せ、夕顔を見ると、枕元に夢に現れた女が幻のように見えて、ふつと消え失せた。ものに気取られたかと昔物語にもある出来事を異様に興味悪く思う。それよりもまず夕顔がどうなったかと心が騒ぎ、物の怪に取り憑かれた人に近づくのは危険だと気にする余裕もなく夕顔に寄り添い起こすが、夕顔は冷え入っていくばかりで、息はすでに絶えはてていた。

衝撃的で怪異な場面がリアルに描かれている。ここで源氏的心は細やかに動く。暗い部屋に戻った時の夕顔や右近の様子を探ったとき、源氏はまだ強がっていた。息をしない夕顔に気づいたときは、夕顔に対してどうしたらよいのかわからなくなっているが、几帳を引き寄せるなどまだ落ち着きもあつた。しかし、灯りのもとで夕顔を見たとき、その枕元に見えた女の幻を興味悪く思い、夕顔が気取られたかと動揺している。心の余裕はなくなり、冷え入る夕顔に寄り添っているとき、源氏ははじめて夕顔の死を実感した。そして「言はむ方なし」と短文により、言葉も出ず呆然としている源氏の姿が描かれる。

D

<ul style="list-style-type: none"> ・頼もしくいかにと言ひふれたまふべき人もな 	<ul style="list-style-type: none"> ・冷え入りにたれば、け 	<ul style="list-style-type: none"> ・あなむつかしと思ひけ 	<ul style="list-style-type: none"> ・さこそ強がりたまへど、若き御心にて、言ふかひなくなりぬるを見たまふに、やるかたなくて、つと抱きて、
---	---	---	--

し

・夜中も過ぎ
・風のやや
荒々しう吹
きたる・松
の響き木深
く聞こえ
・気色ある鳥
のから声に
鳴きたる
(泉)
・こなたかな
たけ遠く疎
ましきに人
声はせず

・屏風の上、

くなりゆく

る心地みな
さめて、泣
きまどふ

・ものもおほ

「あが君、生き出でたまへ、
いとみじき目を見せたま
ひそ」とのたまへ
・南殿の鬼のなにがしの大
おびやかしける例を思し出
でて、心強く、「ざりとも
いたづらになりはてたまは
じ。ゝあなかま」と諫めた
まひて、いとあわたたしき
にあきたる心地したまふ
・この男を召して、「ここ
に、いとあやしう、物に襲
はれたる人のなやましげな
るを、ただ今惟光朝臣の宿
る所にまかりて、急ぎ参る
べきよし言へと仰せよ。な
にがし阿闍梨をここにものす
るほどならば、ここに來べ
きよし忍びて言へ。かの尼
君などの聞かむに、おどろ
おどろしく言ふな。かかる
歩きゆるさぬ人なり」など、
ものたまふやうなれど、
胸はふたがりて、この人を
空しくしなしてんことのみ
みじく思さるるに添へて、
おほかたのむくむくしさ譬
へん方なし

・などてかくはかなき宿は取
りつるぞと、くやしさもや
らん方なし
・これもいかならんと心そら

ここかしこ
のくまぐま
しく

えず、君に
つと添ひ・
わななき死
ぬべし

にてとらへたまへり・我ひ
とりさかしき人にて、思し
やるかたぞなきや
・もの足音ゝ背後より寄り
来る心地
・惟光とく参らなと思す
・夜の明るるほどの久しきは、
千代を過ぐさむ心地したま
ふ

頼つて相談できる人もいなく、源氏は孤立している。夕顔のもう
どうにもならない様子を見て、抱きしめて生き返ってくれ、悲しい
めにあわさないと云うばかりである。夕顔は冷えきつていて、
疎ましい感じに変わっていく。右近はひどく泣き惑うばかりである。
源氏は昔の蘇生談を思い出し、このままだめになってしまふことも
ないだろうと気強く自分を励ましてはいるが、急ななりゆきに呆然
としている。源氏は、預かりの子に、惟光や阿闍梨を呼ぶこと、尼
君の耳に入らぬよう大げさには言うなということを気丈に伝えよう
としているが、内面では胸がつまって夕顔をこのまま死なせてしま
うことをたまらなくつらく思っている。夜中も過ぎ、あたりはたと
えようもなく無気味である。風がやや荒々しく吹き、松風の木深く
響く音、鼻かと思われる鳥のしわがれた鳴き声が聞こえる。こなた
かなたも遠く隔たった感じで気味悪く、人声一つしない。源氏はこ
の廃院に來たことを後悔する。右近は源氏に寄り添って、震えて今
にも絶え入りそうな様子である。しつかりしているのは、自分一人
という状況で源氏は途方にくれるばかりである。あたりだけでなく、

家の中も屏風の上の方は暗くて、何かあやしいものが足音を踏み鳴らしながら近づいてくるようで無気味である。源氏は惟光に早く来てほしいと思いつつ、夜が明けるまでの長さを感じている。

亡くなった夕顔の様子が疎ましく変化し、あたりはいっそう無気味さを増す中、源氏にはなすすべもなく、誰一人として頼るものがない状況である。廃院に来たことを後悔し、夕顔を失った悲痛を胸に秘めながらも、自分を励まし、主人として気丈に振る舞おうとしている。

E

<p>・鶏の声はるかに</p>	<p>・惟光朝臣参れり</p>
<p>・命をかけて、何の契りにかかる目を見るらむ、わが心ながら、かかる筋におほけなくあるまじき心の報いにかく来し方行く先の例となりぬべきことはあるなめり。忍ぶとも世にあること隠れなくて、内裏に聞こしめさむをはじめて、人の思ひ言はんこと、よからぬ童べの口ずさびになるべきなめり。ありありて、をこがましき名をとるべきかな、と思しめぐらす。</p>	<p>・召しにさへ怠りつるを憎しと思すものから、召し入れて、のたまひ出でんことにあへなきに、ふとももの言はれたまはず。</p>

<p>・大夫のけはひ聞くに、はじめよりのことうち思ひ出でられて泣く</p>	<p>・えたへたまはで、我ひとりさかしがり抱き持たまへりけるに、この人に息をのべたまひてぞ、悲しきことも思されける、とばかり、いといたくえもとめず泣きたまふ</p>
---------------------------------------	--

夜が明け、遠くから鶏の声が聞こえてきた。源氏は、何の因果でこんな目にあうのか、藤壺を思慕するなど大それた思いを抱いた報いか、この出来事が帝の耳に入り世間でも噂になるだろう、愚か者の汚名を被ることになるかとあれこれ思いをめぐらしている。現実に戻り、自分の行動を後悔したり、立場もあるだろうが世間体を気にする源氏の心が描かれる。

惟光が参上した。源氏は事件の顛末を言おうとしてもすぐには語れない。右近が泣くと、気を張っていた源氏の心も惟光の顔を見ると緩み、悲しみの気持ちちがわきあがり、激しくとめどなく泣くのであった。

各場面を作者は行動描写、心理描写とも精緻に表現している。「伊勢物語」の〈芥川〉に、恋人が荒れた場所にいる鬼に殺されるといふ場面があるが、そこでは出来事と歌を通して心情のクライマックスが簡潔に描かれている。作者は創作に当たって昔物語を抛り所にしているであろうが、十一世紀初めに書かれた物語の、近代性を備えたような精緻な心理描写には改めて驚嘆の念を抱かずにはいられない。

以上のことを踏まえつつ授業を展開したいと考える。周囲の状況などを説明し、源氏の心情や行動に関する箇所を中心に問いかけしつつ、内容把握をさせたい。そして、この場面の内容把握を通して、作者、紫式部が人間の心のどのような点に関心を持ち、どのように人間の心をとらえていたかについて考えさせ、文章にまとめさせたり、話し合いをさせたりしたいと思う。そこから人間の普遍の心や時代や立場における心が浮かび上がってくるのではないかと考える。

〔注〕「源氏物語玉の小櫛」本文引用は『近世文学論集（日本古典文学大系）』（岩波書店）、「源氏物語」本文引用は『源氏物語一』（新編日本古典文学全集）』（小学館）によった。

（参考・引用文献）

- 『近世文学論集（日本古典文学大系）』（岩波書店・一九六六年）
- 『源氏物語一（新編日本古典文学全集）』（小学館・一九九八年）
- 『源氏物語の方法と構造』森一郎（和泉書院・二〇一〇年）
- 『源氏物語の人物と表現』原岡文字（翰林書房・二〇〇三年）
- 『源氏物語講座 第三卷 各巻と人物Ⅰ』山岸徳平・岡一男監修（有精堂・一九七一年）

（広島大学教育学研究科研究生）